

いますけれども、きょうのメイン・ディッシュというふうに、こういうものを見せますというように、頭でハイライト的に見せます。そういう部分が、テレビ公開講座にもある。話を1つ1つ細かい部分から聞いていって、最後に、ああ、なるほどこの章はこういうことを学んだんだなということがわかるというつくり方というのは、テレビ屋にとっては非常にまどろっこしい。頭で、きょうはこんなことをやるということをまずやっていただいて、それじゃそのことについて個々にお聞きしよう、そういう話の展開をさせていただけないかということもいろいろ討議をしました。

1回分の打ち合わせで大体5、6時間かかるようなこともあったりしまして、非常に皆さん熱心にご協力してくださいました。われわれテレビ屋としてはまだまだむずかしいなという気がしておりますけれども、先生方にとってみたら、何と素人っぽい番組ではなかろうかという不満は残ったかと思うのですけれども、テレビ屋としては、ほんとのいえばもっとレベルを下げなければいけないのではないかという感じはしております。

司会 ありがとうございます

以上、大阪大学の蛋白質馬研究所でおつくりになった経過並びに内容についてのご説明がございました。

これらにつきまして今度堀江部長の方から、問題提起とちうことでお話しただけたらと思います。

### テレビ映画の必然的性格

堀江（放送大学学園） 現実に毎日、毎日、放送大学学園の番組をつくっておりますので、いまあんまり偉そうなことをいうと天につばするようで、本当に恐ろしくていえないので、その辺は大変慎重に発言しなきゃいかぬと覚悟を決めているところでございます。二つの番組を拝見し、また、テキストを拝見して、正直にいって、それぞれ目的に合った大変すばらしい番組だったと思います。

特にOUの場合、内容はむづかしくてよくわかりにくいかもしれませんが、ともかく、あれだけのものをつくれるということは、それぞれのモデルをとってもかなわぬ。これは大阪大学の番組を見ても、いろいろな模型がございまし

た。筋の収縮のときに濃くなる薄くなる、あれがOUだったらどうしたんだろうなと想像しますと、恐らくあそこに簡単なセロハンの立体模型をつくって、重ね合わせて、スライドさせてでも、立体的につくり上げるだろう。タンパク質のグリシンやその他の説明も、全部平面的な形になっておる。ところが、OUだったら恐らく全部これを模型にするだろうなというようなイメージで、これは制作体制なり制作スタッフなり、囲んでいる条件の違いということをも百も二百も承知の上で思うんですけれども、そういうことのできるOUの化学番組の強さというのをしみじみ感じました。放送大学の場合にもあれに負けちゃいかぬ、どうしたらいいんだろうなということをつくづく思いました。もし先生方から、OUのようなああいうものをという要求が出たときに、われわれがそれを立体化できるだけのアイデアなり制作能力を持つだろうかということを感じながら見ました。

しかし、大阪大学のタンパク質の番組も、いま制作者がおっしゃっていましたが、出演者も大変滑らかで、非常にお上手で、わりあいとソフトで、一人一人に語りかけるというのでしょうか、午前中の木下さんのお話ではありませんけれども、その辺についても大変すぐれた出演者であったという気がします。特に実験を中心にするというのは、確かにいままでの放送大学開発センターの行ってきた幾つかの実験番組よりも非常に印象的で、恐らく、見ている人があまり興味のない方であったとしても、筋原繊維がATPとカルシウムイオンによってきゅつとしまる。ああいう仕組みのあたりのところを、理掘じゃなくて、見ればなるほどという納得感もある。このテキストで書いてあるのを読んでもよくわからないけれど、ああいうのは一目瞭然というのがまさにそうだ、と思いました。

映像と教材——生化学の場合——ということになれば、化学番組では、午前中の話にありました、無理やりに絵をつくるということではなくて、素直に、絵がなければどうしても講義が十分に行われたいのではないか。恐らくこれまでの大学の授業の中でも、絵のかわりに先生が手元の演示実験をするし、小学校の時代でも掛け図があるしという形で、映像による何かの補充的な役割りというのは、自然科学の場合には欠かすことができない。そのことは、きょうの二つの番組が如実に物語っておるだろうと思うのです。

問題は、私ども放送大学の制作側で考えて、ただそれだけなのかどうかということ。映像と印刷教材の組み合わせに関する比較研究でございますから、当然なんですけれども、この映像は単にスライドとか映画とかそういうようなものじゃなくて、やはりテレビということ想定しているかと思うのです。

その場合に一番私どもが考えなければならない映像は、どういう映像をいうかといいますと、テレビにおける伝達機能の問題をどうとらえるのか、とかかわります。『タンパク質』という図書は、この通りすばらしい。でも印刷教材は、やさしいものであったとしても、手にして読む方がせいぜい一万人から一万五、六千人あれば、これはもう超ベストセラーだろうという気がするのです。

もし受取人がその程度のものであったとすれば、テレビをその程度の人を対象にしてつくるのだと覚悟を決めたら、テレビ屋としてこれほど恥ずかしいことはない。少なくとも最低十万人ぐらいの人たちに情報を伝達する仕事、その位の人にわからせるための映像でなければならぬと思っております。したがって、この辺について一体どう考えたらいいのかという感じを非常に強く持っております。

特に大阪大学の先生方にご質問申し上げるのは非常に失礼でございますけれども、これは放送利用の公開講座でございますので、広く不特定のいろんな人たちにあまねく大学の授業を公開するという目的性を持っていらっしゃるのでございますから、この辺はどういうふうに考えていったらいいのかということ、最初にお聞きしたいわけです。

つまり、これまでの大学教育の先生方の手段というのは、印刷メディアによる教育方法と、口によって伝えるという教育方法の二つしか手元になかった。しかし、放送というもう一つの伝達方法をアカデミックな方々が手にしたならば、そのメディアに何を託そうとするのか。その辺は従来の大学教育の、特にアカデミックな部分で非常にむずかしい。ある特定の、選抜された非常に少数の人たちの間に——ゼミなんか典型的な教育手段だろうと思うんですが——それとは対極にあるメディアを手にした場合に、特に公開講座としてはどう考えていったらいいのか。

先ほど小松さんが、もっとやさしくもっとやさしくと思ったとおっしゃいましたけれども、対象が大学レベルでございますから、もっとやさしくするということはないだろうと思うのですが、もっとやさしくせずに、大阪大学でおつくりになったすばらしい一般図書的な印刷教材そのもののような番組を、どういうふうにしたら組み込めるのか。正直に申し上げて、印刷教材の方がその辺についてはるかに心配りがあった。あえていわせてもらえば、テレビの番組づくりと印刷教材のつくり方、いま私がいった「広くあまねく」という点に関するメディアの特性から考えると、どうも印刷教材の方がよりその辺についての心配りがなり心配りがあったつくり方がなされたのではないかという感じが非常に強いのです。その辺が、特にサンテレビなり大阪大学の関係者の方にお聞きしたい点でございます。

司会 どうもありがとうございました。

それでは最後に、矢部先生、何かつけ加えていただくことを……。

## 専門と教養と

矢部（放送大学） 放送大学の立場ということで、大変おもしろく、いろいろ考えさせられることの多い二本のビデオでした。ことに、きのうからずっとやってまいりまして、絵にならないものというのではなくて、自然形のものが絵になるのであろうという期待で、話がずっときょうの第四セッションまできたわけです。また逆に、絵になるということの中でとらえてみると、そこにいろいろの問題があるということを感じました。ことにいま放送大学の現在のスタッフの中でおりおり議論がございますけれども、自然系が物理の宮代教授と、私。応用化学系でございますが、素人として、しかし、化学番組の一般的なものという立場から拝見して、若干感想を述べさせていただきます。オープン・ユニバーシティの方の番組についてはかなり高度なものであるということで、主に主題を、蛋白研でおつくりになりました二番目の番組について申し上げます。

まず、先ほどからお話を伺いまして一番驚きましたのは、非常に短期間にこれだけ練れた企画を、しかも、それをアピールするように、「タンパク質と脚線美」だとか、「タンパク質は美人をつくる」のかと思ったら、「タンパク質も」と